情報科学研究科

Ⅰ　2020 年度大学評価委員会の評価結果への対応

【2020 年度大学評価結果総評】（参考）

情報科学研究科では、コースワークとリサーチワークを適切に組み合わせた教育を実施し、専門分野の高度化に即応できる教育が適切に提供されているとともに、外国人留学生を積極的に受け入れる体制を構築し、かつ外国人入学者数を安定的に確保している点が高く評価される。また、2019 年度より、リサーチワークおよび修士論文のセメスター化を実現し、学生が 9 月から 1 年間の留学や半期留学に柔軟に対応しやすい履修体系を整えたこと、中国模範的ソフトウェア学院との間でダブルディグリープログラム（DDP）を進めている点、英語で行う授業と日本語で行う授業を用意し、学生の能力に応じて選択できる点、海外学会での研究発表を強く奨励しそのサポートをしている点、留学生への日本語と日本文化についての科目を設置している点など、グローバル化推進に力を注いでいる点も高く評価される。さらには、情報科学研究科独自の取り組みとして、教員の研究テーマについて交流する場として、「情報科学オープンセミナー」を設定し、研究科内の FD 活動が適切に行われていることも高く評価できる。

中期目標・年度目標も概ね適切に設定されているが、達成指標などについてより定量的な指標の導入が望まれる。

【2020 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2020 年 6 月に中国模範的ソフトウェア学院連盟とのダブルディグリープログラム（DDP）協定を更新した。DDP による留学生に関しては、2019 年度入学許可の 2 名を 2020 年 9 月から実際に受け入れ、2020 年度に新たに 2 名の入学を許可した。DDP 以外の留学生では、9 月入学で 2 名を受け入れ、2021 年度 4 月入学で 4 名の学外受験者を合格とした。学生の学会発表の奨励も推進し、コロナ禍の状況のもと、国際会議発表は 2019 年度と同数の 12 件の実績を達成した。年度目標に関しては、可能な限り定量的な達成指標を設定し、5 つの項目で自己評価 S を達成した。2021 年度以降もコロナ禍の影響を見定めながら、将来のグローバル化の方向性を定めつつ、留学生、日本人学生のいずれにも魅力的な研究科づくりを継続して進めていく予定である。

【2020 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

情報科学研究科では、コースワークとリサーチワークを適切に組み合わせた教育、かつ専門分野の高度化に即応できる教育が提供されている点が高く評価される。さらに外国人留学生を積極的に受け入れる体制を構築しており、ダブルディグリープログラム（DDP）については 2020 年 6 月に中国模範的ソフトウェア学院連盟との協定が更新されたことで、留学生受け入れ数がさらに上向くことを期待したい。COVID-19 環境下においても、学生の学会発表の奨励を継続的に推進し、国際会議発表は 2019 年度と同数の 12 件の実績を達成するなど、研究教育活動を継続している点を高く評価したい。可能な限り定量的な達成指標を年度目標に設定し、5 つの項目で自己評価 S を達成した点は評価に値する。2021 年度以降も続く COVID-19 の影響を勘案しつつも、COVID-19 後の研究科のあり方について積極的に検討し、留学生、日本人学生のいずれにも魅力的な研究科づくりが継続して進められることを期待する。

Ⅱ　自己点検・評価

1　教育課程・教育内容

【2021 年 5 月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

1.1　教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
①修士課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。	S　[A]　B
※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。 コースワークは 2 年間で 18 単位、リサーチワークは同じく 2 年間でオープンセミナー2 単位、特別研究 1A、1B、2A、2B で計 6 単位、特別演習 1A、1B、2A、2B で計 4 単位の構成となっている。本研究科では、コースワークは主に修士論文作	

※注 1　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注 2　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

成に向けた研究の遂行に必要な専門知識の獲得と位置付けている。リサーチワークは実践的な研究能力の向上に資するものと位置付けている。特に 2019 年度からリサーチワークのセメスター化を実現し、9 月から 1 年間の留学や半期留学に対応しやすい履修体系を整えた。学生は当該教育研究領域の開講科目と周辺領域での開講科目とから 18 単位分を修得する。各教育研究領域で開講される科目群は、英語で講義が行われるものと日本語で講義が行われるものとが用意されており、学生は自身の能力に応じて選択するが、当該分野周辺の専門技術習得のために十分な技術基盤が得られるように配分している。リサーチワークにおいては、時間管理および進捗管理を進めるため、2 月に修士論文中間発表会をポスター発表形式で開催している。修士論文発表会は 2 トラックで多くの教員が質疑に参加できるように配慮するなど、評価の公平性を保ちつつ、評価の厳格化を目指すことで修士論文の質の向上を図っている。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・大学院学則

・https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/graduate/

・https://cis.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/2021/04/2021gs-courseoutlines1-20210408.pdf

・https://cis.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/2021/03/2021gs-courseoutlines2-20210329.pdf

②博士後期課程において授業科目を単位化し、修了要件としていますか。	[はい]　いいえ

【根拠資料】※「はい」を選択した場合に単位化及び修了要件として設定されていることが確認できる資料を記入。

・大学院学則

・https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/graduate/

・https://cis.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/2021/04/2021gs-courseoutlines1-20210408.pdf

・https://cis.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/2021/03/2021gs-courseoutlines2-20210329.pdf

③博士後期課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。	S　[A]　B

※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。

2016 年度から博士後期課程にコースワークを導入した。各教育研究領域にリサーチワークとして特別研究と特別演習を置き、さらにコースワークとしてプロジェクト科目を設置して両者を組み合わせた教育課程を行うものである。コースワークは、問題解決能力を育成するものと位置付けており、リサーチワークは文字通り自身の研究能力を向上させるだけでなく、研究指導能力までも養成すると位置付けている。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・大学院学則

・https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/graduate/

・https://cis.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/2021/04/2021gs-courseoutlines1-20210408.pdf

・https://cis.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/2021/03/2021gs-courseoutlines2-20210329.pdf

④専門分野の高度化に対応した教育内容を提供していますか。	S　[A]　B

※学生に提供されている専門分野の高度化に対応した教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

【修士】

情報科学にはコンピューティングに関する要素研究と、コンピュータ上において情報処理問題を扱うコンピュータシステム、さらに社会的ニーズに基づく対象をトータルシステムとして解決するための情報システムの教育研究がある。本研究科では、学部での教育コース（コンピュータ基礎、情報システム、メディア科学）の上に 3 つの研究領域と国際化対応を目指した 4 つ目の研究領域を配置して専門技術習得のために十分な知識および技術基盤が得られるように教育課程を編成している。それぞれの領域のテーマと開講科目とを以下に示す。

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

第1研究領域（コンピュータ基礎）：情報システムを構築するための並列コンピュータの構造論、ソフトウェア環境、暗号理論、ソフトウェア検証などの研究を行う。
第2研究領域（情報システム）：人工知能、進化計算、データマイニング、Webシステム構築などの研究を行う。
第3研究領域（メディア科学）：音声・言語処理、パターン認識、形状モデリングなどの研究を行う。
第4研究領域（国際化対応情報科学）：国際化対応のための技術英語・論文・発表技術、先端ビジネスアプリケーションシステム開発などの研究を行う。
また、最新の研究活動について知る機会として、選択科目の情報科学特別講義と、各教員がオムニバス形式で実施する必修科目の情報科学オープンセミナーを開講している。

【博士】
博士後期課程の教育は、それぞれの専門分野における研究活動を推進するリサーチワークと、幅広い知識を養うためのコースワークに分かれている。リサーチワークでは、専任教員の指導のもと、難易度の高い国際会議への投稿および発表を推進している。コースワークでは、第1研究領域(コンピュータ基礎)、第2研究領域(情報システム)、第3研究領域(メディア科学)から、バランスよく領域を選択させ、広い知識の習得を心掛けている。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/graduate/
・https://cis.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/2021/04/2021gs-courseoutlines1-20210408.pdf
・https://cis.hosei.ac.jp/wp-content/uploads/2021/03/2021gs-courseoutlines2-20210329.pdf

⑤大学院教育のグローバル化推進のための取り組みをしていますか。	[S] A B

※大学院教育のグローバル化推進のために行っている取り組みの概要を記入。

【修士】
中国模範的ソフトウェア学院との間でダブルディグリープログラム（DDP）を進めているほか、英語で行う授業と日本語で行う授業を用意しており、学生の能力に応じて選択できる。これら英語授業には例年、日本人学生の履修実績があり、一般学生のグローバル化推進にも役立っている。また、外国人留学生を積極的に受け入れるよう、外国人特別入学制度を用意している。大学院学生に対する教育の一環として、英語でのプレゼンテーション能力を養いグローバルな視点を持たせるため、国際会議での研究発表を強く奨励している。国際会議の発表が決まった学生は、情報科学オープンセミナーで発表練習する場を設けている。また、留学生にも正しい日本語と日本文化についての知識を与えるべきであるとの判断から、日本語理解1、2の科目（修了単位には数えない）を開設している。
理工学研究科と共同での英語による学位授与を行うIISTを2016年9月に開設し、2020年度には2名の学生が修士課程に入学した。
修士論文の審査及び評価においては、国際会議での発表を加点しており、教員の指導のもと、積極的な論文発表が行われている。今後も、国際会議での論文発表への誘導を図り、グローバルに活躍できる人材育成を助成し、強化する。

【博士】
理工学研究科と共同での英語による学位授与を行うIISTを通して、DDPの修了生2名が2019年度と2020年度に博士後期課程を修了している。国際会議での表彰実績もあがってきている。
博士論文の審査及び評価においては、論文あるいは国際会議発表を条件にしており、教員の指導のもと、積極的な論文発表が推奨されている。今後も、国際会議での論文発表への誘導を図り、グローバルに活躍できる人材育成を助成し、強化する。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
2020年6月に中国模範的ソフトウェア学院連盟とのDDP協定を更新し、5年間の延長を行った。
DDPを修了してIISTの博士後期課程に進学した学生が2021年3月に博士後期課程を修了した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

※注1　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注2　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・学籍
・論文発表データベース（CIS Moodle 上に構築）

1.2　学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。　S　[A]　B

※履修指導の体制及び方法を記入。

【修士】

・修士 1 年に、各教員のオムニバスによる情報科学オープンセミナーを必修科目として配置することで、最新の技術動向を幅広く認知する機会を与え、多様な研究領域への興味の誘発と、以後の履修の誘導を行っている。
・第 4 研究領域に配置された科目（英語で講義を実施）を含めてより充実したカリキュラムを運用し、専任教員だけでなく企業からも講師を招いていることから、学生のより広範囲に渡る研究領域の俯瞰を可能としている。
・学生は、自身の研究テーマにおいて問題解決に必要な専門技術習得のため、自主的にもしくは指導教員の指導のもとに履修科目を選定している。
・指導教員は定期的に研究進捗報告を受けて、適切な助言や学習指導を行っている。

【博士】

・学生は、指導教員のもと、適切なコースワークを選定している。
・学生は、自身の研究テーマにおいて問題解決に必要な専門技術習得のため、自主的にもしくは指導教員の指導のもとに技術の調査研究を進めている。
・指導教員は定期的に研究進捗報告を受けて、適切な助言や学習指導を行っている。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・情報科学オープンセミナー（https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/special/）

②研究科（専攻）として研究指導計画を書面で作成し、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。　[はい]　いいえ

※ここでいう「研究指導計画」とは、事務手続きのスケジュールやシラバス等の個別教員の指導計画を指すのではなく、研究科としての研究指導体制及び研究指導スケジュールをまとめたものを指します（学位取得までのロードマップの明示等）。また、「あらかじめ学生が知ることの状態」とは、HP や要項への掲載、ガイダンスでの配布等が考えられます。

【修士】

・ガイダンス時に研究指導計画について書面を用いて説明を行っている。
・課程紹介の Web サイト上で、学習および研究活動の時間的流れを公開し、研究指導に活用している。

【博士】

・ガイダンス時に研究指導計画について書面を用いて説明を行っている。
・課程紹介の Web サイト上で、学習および研究活動の時間的流れを公開し、研究指導に活用している。

【根拠資料】※研究指導計画が掲載された文書・冊子等の名称を記入。

・https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/degree/

③研究指導計画に基づく研究指導、学位論文指導を行っていますか。　[はい]　いいえ

※組織的な研究指導、学位論文指導の概要を記入。

【修士】

修士課程の学生は、課程 2 年間で少なくとも 1 回は学外研究発表を行うことを前提に研究指導が行われていて、修士論文発表会で確認している。ダブルディグリープログラム（DDP）の学生についても同様の方法で指導を進めている。また、修士課程学生の場合は入学の 1 年後、DDP の学生は半年後、中間発表会で研究進捗をポスター発表し、全教員から研究の方向性についてのコメントを得る機会を与えている。

【博士】

博士前期課程の学生は、毎年、中間発表会で研究進捗をポスター発表し、全教員から研究の方向性についてのコメントを得る機会を与えている。また、研究科長が指導教員に対して、学位取得に関する具体的な計画について、その進捗を毎

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

年確認している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・第 326 回（2020 年度第 14 回）情報科学研究科教授会議事録

④通常の教育課程や教育方法に加え、COVID-19 への対応・対策として、教育内容、教育方法、成績評価等の一連の教育活動において工夫を講じていますか。行っている場合はその内容と教育活動の効果について教えてください。

※取り組みの概要を記入。

2020 年度に実施した 30 の講義科目中 27 科目で同時双方向オンライン授業を導入した。「オンライン講義ポータル」を作成し、学生がオンライン講義を受講するために必要な情報を同一 Web サイト上に集約した。研究指導もオンラインで行う体制を整備した。中間発表会、修士論文発表会、博士論文公聴会も 2020 年度はハイブリッドで実施し、学生の事情に応じて対面でもオンラインでも参加できるようにした。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・オンライン講義ポータル（CIS Moodle 上に構築）

・第 333 回（2020 年度第 21 回）情報科学研究科教授会議事録

1.3　成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。　S　[A]　B

※成績評価と単位認定の確認体制及び方法を記入。

【修士】

・シラバスで事前告知した基準に基づき、成績評価を行っている。

・成績の確認においては、入力ミス等に対して、申告に基づき教授会での成績訂正手続きが公正に実施されている。

・ダブルディグリープログラムにおける単位互換認定については、先方の大学院シラバスと当方のシラバスとを対比させて厳密に単位認定を行っている。

・修士論文については、副指導制度を導入し、合議で成績評価を行っている。

【博士】

・シラバスで事前告知した基準に基づき、成績評価を行っている。

・学位論文については、論文審査委員会を設置し、予備審査と本審査により厳格な学位認定をおこなっている。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・第 315 回（2020 年度第 3 回）情報科学研究科教授会議事録

・第 320 回（2020 年度第 8 回）情報科学研究科教授会議事録

・第 327 回（2020 年度第 15 回）情報科学研究科教授会議事録

・第 332 回（2020 年度第 20 回）情報科学研究科教授会議事録

②学位論文審査基準を明らかにし、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。　[はい]　いいえ

※学位論文審査基準の名称及び明示方法を記入。

【修士】

・ガイダンスにおいて、書面にて学位論文審査基準を配布し、説明を行っている。

・毎年発行する小金井大学院要項に学位論文審査基準を明記し、年度初めのガイダンスで学生に周知している。

・Web サイト上で「学位修了要件」を公開している。

【博士】

・ガイダンスにおいて、書面にて学位論文審査基準を配布し、説明を行っている。

・毎年発行する小金井大学院要項に学位論文審査基準を明記し、年度初めのガイダンスで学生に周知している。

・Web サイト上で「学位修了要件」を公開している。

・Web サイト上で社会人特別入試における早期修了の事前審査の枠組みを公開している。

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【根拠資料】※学位論文審査基準にあたる文書の名称を記入。また、冊子等に掲載し公表している場合にはその名称を記入。

・情報科学研究科修士課程学位審査内規
・情報科学研究科博士後期課程学位審査内規
・博士学位申請資格対象となる学術誌及び学術会議基準
・小金井大学院要項
・学位修了要件（https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/graduate/）
・情報科学研究科博士後期課程における社会人学生の早期修了に関する内規
・https://cis.hosei.ac.jp/news/2020/12/21/9408/

③学位授与状況（学位授与者数・学位授与率・学位取得までの年限等）を把握していますか。	[はい]　いいえ

※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。

・大学院在籍者数の確認は、年度初めに教授会に報告されている。
・学位授与率に関わる情報（退学者、休学者）については、届け出の後教授会の議題となっており、教授会で把握できる。
・中間発表会での討論では直接的に進捗を把握しており、これらの情報を総合することでその年度の学位授与見込み数（同時に在籍年数）を把握している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・第 339 回（2021 年度第 2 回）情報科学研究科教授会議事録

④学位の水準を保つための取り組みを行っていますか。	S　[A]　B

※取り組みの概要を記入。

【修士】

修士課程の大学院生には、1 年生の秋学期末に中間発表会を義務付けている。ポスター発表形式で開催し、研究活動内容を報告させるとともに、研究の内容や進捗度を評価し、優秀者を表彰している。優秀者を決める投票には、教員だけでなく参加院生も加わるため、大学院生同士も互いに評価し合うことになり、モチベーションを高める効果がある。また、論文発表データベースを作成し、他の学生の学会発表状況を共有することにより、各学生のモチベーションを高める試みを 2018 年度に開始した。

【博士】

博士後期課程においても、2014 年度から学位申請を行っていない学生については、修士課程学生の場合と同様に中間発表を義務付けている。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・第 326 回（2020 年度第 14 回）情報科学研究科教授会議事録

⑤学位授与に係る責任体制及び手続を明らかにし、適切な学位の授与が行われていますか。	[S]　A　B

※責任体制及び手続等の概要を記入。ただし、博士については、学位規則のとおりに行われている場合には概要の記入は不要とし、「学位規則のとおり」と記入。

【修士】

修士課程では、修士論文審査にあたり、「法政大学学位規則」を順守し、主査および副査が修士論文発表会の場で厳密に審査し、その後の教授会の場で最終的な修了認定を行っている。審査基準を明確にするために、「情報科学研究科修士課程学位審査内規」を策定し運用している。副査は、指導教員である主査が指名した研究領域が近い教員と、研究科長が指名した教員の 2 名で構成し、適切かつ客観的なに学位授与の質保証を行っている。

【博士】

博士の学位審査の手続きと基準を内規に定めている。社会人特別入試における早期修了の事前審査についても内規を定めて実施している。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

2020 年度に新たに「情報科学研究科博士後期課程における社会人学生の早期修了に関する内規」を定め、2021 年度第 2 回入試から実施を開始し、早期修了候補者として 1 名を合格とした。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・情報科学研究科修士課程学位審査内規
・情報科学研究科博士後期課程学位審査内規
・情報科学研究科博士後期課程における質保証のためのガイドライン
・情報科学研究科博士後期課程における社会人学生の早期修了に関する内規

⑥学生の就職・進学状況を研究科（専攻）単位で把握していますか。	[はい] いいえ

※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。

・論文指導教員が把握し、大学院の担当を兼ねる学部の就職担当がそれらを取りまとめて、Web 上のスプレッドシートで共有している。
・スムーズな就職活動を目的として、大学院生へのインターンシップ参加を強く勧めている。さらに徹底するために、インターンシップの単位化を 2016 年度から導入した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・情報科学部教授会議事録（学部と大学院の就職状況をまとめて報告）

1.4　学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

①分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S [A] B

※取り組みの概要を記入。

【修士】

情報科学領域では、研究成果を国内・海外の学会への投稿論文数と会議発表論文数、表彰数が重要な指標となり、これらの数値で学習の達成度を評価している。この指標に基づき、各種奨学金等の優秀学生の選抜を実施している。これらの研究成果については論文発表データベースを構築し、学生間、および、教員間で共有している。また、学会表彰を受けた学生については、修了証書授与式にて、研究科表彰を実施し、学生の学会参加意欲を高めている。

【博士】

国内・海外の学会への投稿論文数と会議発表論文数、表彰数が重要な指標となり、これらの数値で学習の達成度を評価している。この指標に基づき、各種奨学金等の優秀学生の選抜を実施している。これらの研究成果については論文発表データベースを構築し、学生間、および、教員間で共有している。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・日本学生支援機構奨学金返還免除の推薦候補者選考規定
・論文発表データベース（CIS Moodle 上に構築）

②具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。	S [A] B

※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学習成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。

【修士】

・論文発表データベースを構築し、論文投稿、学会発表、学会表彰について学生自らが登録し、情報共有するシステムを導入している。
・修士課程においては、修士論文審査にあたり、「法政大学学位規則」を順守し、主査および副査が修士論文発表会の場で厳密に審査し、その後の教授会の場で最終的な修了認定を行っている。審査基準を明確にするために、「情報科学研究科修士課程学位審査内規」を策定し運用している。

【博士】

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・論文発表データベースを構築し、論文投稿、学会発表、学会表彰について学生自らが登録し、情報共有するシステムを導入している。

・博士後期課程については、審査委員会（研究科教授会）のもと、主査・副査 3 名以上で構成される審査小委員会が試験によって博士論文に関する学識を確認し、審査委員会にその結果を報告し、審査委員会で審議をしたのち、博士学位授与の可否を決定している。なお、主査は本学専任教員に限るが、2 名以上の副査を合わせて、審査小委員会の委員総数の 3 分の 1 以内の範囲で学外者も副査に加えることができる。こうした審査基準は「情報科学研究科博士後期課程学位審査内規」および「博士学位申請資格対象となる学術誌及び学術会議基準」にまとめられており、修士課程同様に学生に周知している。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・情報科学研究科修士課程学位審査内規

・情報科学研究科博士後期課程学位審査内規

・情報科学研究科博士後期課程における質保証のためのガイドライン

・論文発表データベース（CIS Moodle 上に構築）

1.5　教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程及びその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。	S　[A]　B

※検証体制及び方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

【修士】

・研究科として、修士 1 年生での修士論文中間発表会と、修士 2 年生での修士論文発表会を学生の教育成果の検証の機会と位置付けている。発表会の質を判断材料にして、翌年度以降の教育内容の改善を図っている。

・中間発表会はポスター形式の発表であるため、時間をかけて評価でき、学生同士の評価も行われるので、学生に対するフィードバック効果も大きい。

【博士】

・研究科として、毎年 1 回の中間発表会を、学生の教育成果の検証の機会と位置付けている。発表会の質を判断材料にして、翌年度以降の教育内容の改善を図っている。

・中間発表会はポスター形式の発表であるため、時間をかけて評価でき、学生同士の評価も行われるので、学生に対するフィードバック効果も大きい。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・第 326 回（2020 年度第 14 回）情報科学研究科教授会議事録

②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	[S]　A　B

※取り組みの概要を記入。

・学生による授業改善アンケートを教育内容・方法の改善のための有力なツールと位置づけ、授業内にアンケートを実施することで、高い回収率を実現し、授業改善に活用している。

・講義内容に関しては、技術の進展が早い分野であるので日々見直しを行っており、適宜教授会や懇談会などの場で方向性を議論し、新規教員採用時、および次期セメスター兼任講師への講義依頼時にその検討結果を反映させている。

・専任教員の間においては、情報科学オープンセミナーを教員相互の教育・研究の情報交換の場と位置づけ、相互の教育・研究の活性化や相互の連携を図る場として活用している。

・2020 年度春学期は全学による授業改善アンケートの実施が見送られたが、情報科学研究科は情報科学部と共同で独自

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

にアンケート収集の仕組みを構築し、授業改善アンケートを実施した。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

2020 年度春学期に情報科学部と共同で独自に授業改善アンケートを実施した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・情報科学オープンセミナー（https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/special/）

・授業改善アンケート（CIS Moodle 上に構築）

（２）長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・修士論文の中間発表会は、1 年経過時の学習状況を把握する場として、貴重な機会である。研究のマイルストーンになるだけでなく、他研究室の教員の評価を聞くことで、全体の学位授与の質保証につなぐことができている。博士後期課程の大学院生には、毎年、中間発表を課しており、学位授与に至る経過管理として重要な役割を担っている。 ・国際会議での発表を奨励し、学位授与時の学習成果の評価に活用している。	1.4、1.5

（３）問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

情報科学研究科では、修士課程および博士後期課程ともにコースワークとリサーチワークを適切に組み合わせた教育、かつ専門分野の高度化に即応できる教育が提供されている。また、中国模範的ソフトウェア学院との間でダブルディグリープログラム（DDP）および理工学研究科と共同での英語による学位授与を行う IIST を進めている点はグローバル化の観点から高く評価される。特に、2020 年 6 月に中国模範的ソフトウェア学院連盟との協定が更新されたことで、留学生受け入れ数のさらなる向上が期待される。英語と日本語両方の授業を用意し、学生の能力に応じて選択できる点は、一般学生のグローバル化推進にも役立つものと評価される。

学生の学習の活性化のための方策、計画的な研究指導体制の構築、厳正な成績評価、単位認定および学位認定の確認体制は適切であり、学生に周知されている。修士 1 年での修士論文中間発表会、修士 2 年での修士論文発表会、博士後期課程での毎年の中間発表が適切に課されており、翌年度以降の教育内容の改善に活用されている。

COVID-19 下の 2020 年度は 9 割の科目で同時双方向オンライン授業を導入、研究指導もオンラインで行う体制を整備し、発表会、公聴会をハイブリッドで実施するなど受け入れ困難な学生に対してもきめ細かな対応をされていることは高く評価できる。また、学生による授業改善アンケートも独自に行うなど速やかな対応も評価できる。

以上のように、教育課程および学習成果を定期的に検証し、改善・向上のための取り組みを継続的に行っており、環境の変化への対応も機敏かつ柔軟であり、総合的に高く評価される。

２　教員・教員組織

【2021 年 5 月時点の点検・評価】

（１）点検・評価項目における現状

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

2.1　教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①研究科（専攻）独自のＦＤ活動は適切に行われていますか。　S　[A]　B

【ＦＤ活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

・「情報科学オープンセミナー」は、教員の研究テーマについて交流する場として、全教員のプレゼンテーションを 2 年間で 1 周回る形式で行っている。原則、全教員の参加が求められる。

・隔週開催の主任会議でその時々の問題点を抽出し、改善に向けた取り組み（対策）を講じている。より大きな問題については、研究科に設置された質保証委員会に付託して突っ込んだ議論をし、教授会でさらに議論・決議し、対策を実行している。ガイドラインや内規としてまとめ直して運用することもある。

【2020 年度のＦＤ活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。

・情報科学オープンセミナー（春学期の隔週金曜 3 限、教員の研究活動の発表、原則的に教員全員参加）

・主任会議（隔週水曜日、その時々の問題点と改善策の検討、主任会議メンバー）

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・情報科学オープンセミナー（https://cis.hosei.ac.jp/gs/courses/special/）

②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。　[S]　A　B

※取り組みの概要を記入。

・外部資金獲得の取り組みを進め、2021 年度の科研費に 9 件の新規応募を行った。

・資格を持つ教員が早い時期に在外研究・国内研究を行うことを奨励している。

・在外研究・研修、国内研究・研修の成果を、オープンセミナーを通して教員間で共有している。

・教員の研究を加速するために、共同研究者としての大学院生入学者を増やす対策を行っている。

1)学外研究発表の奨励

2)学会参加旅費、登録費の補助

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でＳを選択した場合に具体的な内容を記入。

2021 年度の科研費に 9 件の新規応募を行った。2021 年度国内研究員 1 名を決定し、準備・調整を進めた。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・第 394 回（2020 年 3 月 9 日）情報科学部教授会議事録

・第 340 回（2021 年度第 3 回）情報科学研究科教授会議事録

③組織編制やＦＤ等に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。

※取り組みの概要を記入

2020 年度の情報科学オープンセミナーを同時双方向オンライン形式で実施した。教授会と主任会議を対面とオンラインの両方によるハイブリッド形式で実施した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入

・オンライン講義ポータル（CIS Moodle 上に構築）

（2）長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・在外研究・研修、国内研究・研修は、概ね各年度に 1 名以上がこれらの枠組みによる研究活動を行っており、2020 年度には 2021 年度国内研究員 1 名を決定し、準備・調整を進めた。教員の	2.1

※注 1　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注 2　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

研究活動を活性化させることで、研究の質の向上と、グローバル化への対応力を強化している。	

（3）問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

情報科学研究科では、教員の研究テーマについて交流する場として、全教員が参加する「情報科学オープンセミナー」を設定し、全教員のプレゼンテーションを2年間で1周回る形式で行っている。隔週開催の主任会議で問題点を抽出し、改善に向けた対策を講じるとともに、より大きい問題については研究科全体で取り組んでいる。また、外部資金獲得の取り組みを進め、2021年度は科研費に9件の新規応募を行うなど、研究活動の活性化への努力が認められるとともに、産業界からの外部資金獲得などの検討を行っていることを確認することができた。さらに、在外研究等の奨励、共同研究者としての大学院生入学者を増やす対策を行うなど、研究科内のFD 活動が適切に行われていることは高く評価できる。

COVID-19 対応としては、2020 年度の情報科学オープンセミナーを同時双方向オンライン形式で実施し、教授会と主任会議を対面とオンラインの両方によるハイブリッド形式で実施するなど、現況の環境下で情報科学分野の強みを生かした対応をしていることは高く評価できる。

3　その他の基準の COVID-19 への対応

【2021 年 5 月時点の点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

3.1　その他、学生支援や学生の学習環境や教員の教育環境整備、社会貢献における COVID-19 対応・対策を行っているか。

①その他、研究科として学生支援や学生の学習環境や教員の教育研究の環境整備、社会貢献等における COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。

※取り組みの概要を記入

DDP を除く大学院学生全員にノート PC を貸与し、学外での学習・研究に活用できるようにしている。

教室・ゼミ室にハイフレックス授業のための設備を導入した。ゼミ室の設備は情報科学研究科が情報科学部と共同で独自に構築したものである。教室の一部の設備にも学部と共同で独自の増強を加えている。

【根拠資料】

・https://cis.hosei.ac.jp/faculty/facilities/pc/laptop2020/（学部と共通）

【この基準の大学評価】

情報科学研究科では、ダブルディグリープログラム（DDP）を除く大学院学生全員にノート PC を貸与し、学外での学習・研究に活用できるようにしている。COVID-19 の状況下にあって、オンラインでの受講を可能にするハイフレックス授業設備を教室・ゼミ室に導入している。特にゼミ室の設備は情報科学研究科が情報科学部と共同で独自に構築したものであり、教室の一部の設備にも学部と共同で独自の増強を加えている。さらに、2020 年度の情報科学オープンセミナーを同時双方向オンライン形式で実施し、学内向けのイベントもオンライン形式で実施している。教授会と主任会議を対面とオンラインの両方によるハイブリッド形式で実施している。これら学生の学習環境の整備、教員の教育研究環境整備に可能な限りの対応をしている点は評価される。

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

Ⅲ　2020年度中期目標・年度目標達席状況報告書

No	評価基準		内部質保証
1	中期目標		質保証サイクルを実質化し、かつ、記録に残すことで、教授会構成員全員の質保証の意識を高める活動を行う。
	年度目標		－
	達成指標		－
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	－
		理由	－
		改善策	－
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	－
		改善のための提言	－
No	評価基準		教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
2	中期目標		情報処理学会あるいはACMが定めたカリキュラムを大学院向けに発展させた教科・科目を実施しつつ、先進的な教科・科目を柔軟に組み込む。学外研究機関や、産業界、地域社会等の多様な機関と連携し、研究タイプ・開発タイプなど多様なキャリアパスに対応した教育を展開する。国際化に向け、英語開講科目の設置や国際会議への参加を促進する教育体制を確立する。
	年度目標		産業界との連携の一環として、博士後期課程の社会人学生の教育のあり方について、早期修了を視野に入れた検討を行い、教育体制を整備する。
	達成指標		博士後期課程の社会人学生のための教育体制の整備。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	博士後期課程における社会人学生の早期修了に関する内規を制定し、社会人特別入試に関する広報を行った。これを利用する形で社会人1名の受験があり、合格とした。修士課程についても、過去に他大学の大学院修士課程に在学した者を対象とした在学期間短縮に関する内規を制定した。
		改善策	引き続き、社会人特別入試に関する広報を行い、社会人学生の確保に努める。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	博士後期課程における社会人学生の早期修了に関する内規を制定し、社会人特別入試に関する広報を行った。社会人特別入試を通した学生確保の観点から評価できる。
		改善のための提言	博士後期課程への内部進学者数を増やすための検討、安定的に留学生を受け入れるための検討が必要である。
No	評価基準		教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
3	中期目標		学生に幅広い専門性を身に付けさせるため、複数の教員が研究指導を行うような組織的な教育・研究指導体制の定着を目指す。国際化に向け、英語力を点検できる教育課程を確立する。
	年度目標		COVID-19の感染拡大防止への対応や、社会人等の多様な学生の教育に向けて、オンライン授業形態による講義・研究指導の導入を進める。
	達成指標		オンライン授業を導入した科目の個数。

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	今年度実施した 30 の講義科目中 27 科目で同時双方向オンライン授業を導入した。
		改善策	COVID-19 の状況に応じた対面授業とオンライン授業の柔軟な実施を進める。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	30 の講義科目中 27 科目で同時双方向オンライン授業を導入し、特に授業の質の低下はないとの学生意見が多い。COVID-19 の感染拡大防止策として十分評価に値する。
		改善のための提言	国際化に向けた英語力を点検できる教育課程の確立に関しては、引き続き検討が必要である。
No	評価基準		教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
4	中期目標		高度な専門的知識の修得、俯瞰的な視野の獲得、専門応用能力、コミュニケーション能力の養成を進め、成果を学外発表できる人材を育てる。特に、国際会議での発表を推奨し、学位授与時の評価に用いる。
	年度目標		COVID-19 によって制限された状況下での学外発表について、長期化の可能性も含めて検討を行い、従来実績と比べて遜色のない、学生による研究成果の学外発表を目指す。
	達成指標		学生による学外発表の回数。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	学会発表データベースに、今年度発表分として 26 件が登録された。そのうち、国際会議発表は昨年度と同数の 12 件、受賞は 1 件あり、従来実績と同等の実績を達成した。
		改善策	引き続き、国際会議での発表を推奨する。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	学生による学外発表を推奨しており、国際会議での発表も継続的に行われていて評価できる。
		改善のための提言	国際会議の発表では、単に発表件数だけではなく、査読が厳しくレベルの高い学会で不採択になった投稿も含めて点検できる仕組みを今後構築していくことも、質保証の観点から、必要である。
No	評価基準		学生の受け入れ
5	中期目標		一般入試、推薦入試等の制度を再検討し、学生にとって受験しやすい体制の確立と、入学者の適性判断の厳格化を目指す。DDP・IIST の活動を通した留学生の確保に努める。
	年度目標		中国模範的ソフトウェア学院連盟との DDP 協定を更新し、留学生の受け入れを継続する。社会人学生を受け入れやすい入試体制を整備する。
	達成指標		DDP 協定の更新。受け入れた留学生、社会人学生の人数。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	DDP 協定を更新した。DDP による留学生は、昨年度入学許可の 2 名を 9 月から実際に受け入れ、今年度新たに 2 名の入学を許可した。DDP 以外の留学生では、9 月入学で 2 名を受け入れ、来年度 4 月入学で 4 名の学外受験者を合格とした。社会人については、来年度 4 月入学で 1 名の博士後期課程受験者を合格とした。
		改善策	COVID-19 に対応した留学生の受け入れ体制の充実を進める。
		質保証委員会による点検・評価	

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		所見	中国模範的ソフトウェア学院連盟との DDP 協定を研究科レベルで維持し続けていることは評価できる。一方、DDP 受け入れ人数は減少傾向にあり、増加のための具体策を検討することが好ましい。
		改善のための提言	DDP 協定校との国際ワークショップの開催や IIST との連携による広報活動強化など、何らかの検討を開始すべきである。
No	評価基準		教員・教員組織
6	中期目標		学部と連携した教員採用を行い、4 つの研究分野に適切に配置する。オープンセミナーや複数教員による学外資金獲得活動を通して、教員の研究交流を活発にする。
	年度目標		学部と連携し、教育・研究領域を網羅する教員組織を編成するための人事を行う。
	達成指標		教育・研究領域を定めた人事の実施。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	新任採用において、並列計算の計算量という新領域の教員を採用できた。採用教員は年齢も若く、教員組織の年齢構成を改善できた。また、研究科の内規を改正し、教授会構成員の条件を明確化した。
		改善策	2021 年度は 2 名の新任教員採用を予定しており、引き続き、研究領域と年齢構成を意識した採用を進める。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	研究分野、年齢構成から適切な人材を採用しており評価できる。
		改善のための提言	CG、コンピューターアニメーションなど学生に人気があり特徴的な研究分野の教員が退官した後の補充がなされていない。定員充足率確保のためには、今後、新任教員を採用する際に考慮すべき項目の一つである。
No	評価基準		学生支援
7	中期目標		学部と協力しながら、学生の学位取得後のキャリア支援体制を充実する。留学生向けの日本語教育の支援を継続する。
	年度目標		COVID-19 に対応するために必要な学生支援について検討し、支援体制を整備する。
	達成指標		COVID-19 に対応した学生支援体制の整備。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	春学期授業開始までに、在外の留学生を含む学生がオンラインで授業を受講し、ゼミに参加できる体制を整備した。学内での実験等を必要とする学生に対しては、指導教員の管理のもと学内で研究できる体制を整備した。中間発表会、修士論文発表会、博士論文公聴会をハイブリッドで実施し、学生の事情に応じて対面でもオンラインでも参加できるようにした。また、理工系のための日本語の授業を今年度から開始し、本研究科から 1 名が参加した。
		改善策	引き続き、COVID-19 に対応した学生支援体制の充実を進める。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	在外の留学生を含む学生がオンラインで授業を受講してゼミに参加できる体制を整備した。また、中間発表会、修士論文発表会、博士論文公聴会をハイブリッドで実施し、学生の事情に応じて対面でもオンラインでも参加できるようにした。COVID-19 に対応した学生支援体制の整備を短期間で実現していて評価できる。

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		改善のための提言	運用を通した学生からの意見を集約して今後の改善に繋げることが有効である。
No	評価基準		社会連携・社会貢献
8	中期目標		社会貢献を意識した研究活動成果の公開を進める。外部資金による研究活動や共同研究を通じた研究内容の開示。
	年度目標		外部資金による研究活動の一環として、科研費への応募を推進する。
	達成指標		教授会等における科研費への応募の推奨。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	科研費の応募に対して、組織的な対応を強化する。また、科学技術フォーラムを始めとする対外的な研究成果の公開を積極的に進める。
		改善策	科研費の応募に対して、組織的な対応を強化する。また、科学技術フォーラムを始めとする対外的な研究成果の公開を積極的に進める。
		質保証委員会による点検・評価	
		所見	外部資金による研究活動の一環として、科研費への応募を教授会などを通して推進しており評価できる。一方、応募に至らない教員もおり、応募率の更なる向上が望まれる。
		改善のための提言	科研費を取得している教員リスト及び題目を全教員に配布し、科研費獲得のモチベーションにすると同時にお互いに相談できる体制を整えるなど、科研費の応募を推進する。

【重点目標】

COVID-19 の感染拡大防止に対応したオンライン授業形態による講義・研究指導の導入を重点目標とする。

【目標を達成するための施策等】

特にオンライン会議システムを用いたリアルタイムの講義・研究指導によって、大学院教育に適した少人数教育・個別指導を実施する。

【年度目標達成状況総括】

COVID-19 の感染拡大防止に対応したオンライン授業形態による講義・研究指導を導入し、オンライン会議システムを用いたリアルタイムの講義・研究指導による、大学院教育に適した少人数教育・個別指導を実施した。並行して、学内での実験等を必要とする学生に対しては、指導教員の管理のもと学内で研究できる体制を整備したほか、中間発表会、修士論文発表会、博士論文公聴会をハイブリッドで実施するなど、オンライン形態に偏らない配慮も行った。学生の成果についても、国際会議発表が昨年度と同数の 12 件、受賞が 1 件あり、従来と同等の実績を達成した。教育課程についても改善を行い、博士後期課程における社会人学生の早期修了に関する内規と、修士課程における在学期間短縮に関する内規を制定した上で、前者を利用した社会人特別入試受験者 1 名を合格とした。

【2020 年度目標の達成状況に関する大学評価】

2020年度目標の達成状況に関して、情報科学研究科では、博士後期課程における社会人学生の早期修了に関する内規を制定し、社会人特別入試の広報に努め、学生確保につながったことは、評価できる。また、COVID-19対応として、同時双方向オンライン授業の実施、留学生受け入れ体制の充実などの努力も高く評価される。今後は、COVID-19後に向けて、学生からのフィードバックや培った知見を活かした運用が望まれる。

新任教員の採用においては、新領域の若い教員が採用されたことで、分野と年齢のバランスの向上が見られたことは評価される。今後も先を見据えて、魅力的な分野の優秀な人材確保に努めることが望まれる。

学生の学会発表数と、教員の科研費応募についても、組織的な対応強化により向上が見られていることは評価される、今後さらに質的な向上を目指して、協力体制の工夫などにより一層の向上を目指すことが望まれる。

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

Ⅳ　2021 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	内部質保証
1	中期目標	質保証サイクルを実質化し、かつ、記録に残すことで、教授会構成員全員の質保証の意識を高める活動を行う。
	年度目標	－
	達成指標	－
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
2	中期目標	情報処理学会あるいは ACM が定めたカリキュラムを大学院向けに発展させた教科・科目を実施しつつ、先進的な教科・科目を柔軟に組み込む。学外研究機関や、産業界、地域社会等の多様な機関と連携し，研究タイプ・開発タイプなど多様なキャリアパスに対応した教育を展開する。国際化に向け、英語開講科目の設置や国際会議への参加を促進する教育体制を確立する。
	年度目標	産業界との連携の一環として、2020 年度に整備した博士後期課程の社会人学生の早期修了の枠組みに基づく教育を推進する。
	達成指標	博士後期課程の社会人学生の早期修了の枠組みに基づく教育の実施。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
3	中期目標	学生に幅広い専門性を身に付けさせるため、複数の教員が研究指導を行うような組織的な教育・研究指導体制の定着を目指す。国際化に向け、英語力を点検できる教育課程を確立する。
	年度目標	COVID-19 の感染拡大防止への対応や、社会人等の多様な学生の教育に向けて、対面とオンラインの両方に対応したハイフレックス形態の講義・研究指導の導入を推進する。
	達成指標	ハイフレックス形態を導入した講義科目の個数。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
4	中期目標	高度な専門的知識の修得、俯瞰的な視野の獲得、専門応用能力、コミュニケーション能力の養成を進め、成果を学外発表できる人材を育てる。特に、国際会議での発表を推奨し、学位授与時の評価に用いる。
	年度目標	COVID-19 によって制限された状況下での学外発表について、従来実績と比べて遜色のない、学生による研究成果の学外発表を目指す
	達成指標	学生による学外発表の回数。
No	評価基準	学生の受け入れ
5	中期目標	一般入試、推薦入試等の制度を再検討し、学生にとって受験しやすい体制の確立と、入学者の適性判断の厳格化を目指す。DDP・IIST の活動を通した留学生の確保に努める。
	年度目標	DDP・IIST を通した留学生の受け入れを継続する。他にも社会人、学内進学者、科目等履修生等の多様な学生の確保を目指す。
	達成指標	受け入れた留学生、社会人学生、学内進学者、科目等履修生の人数。
No	評価基準	教員・教員組織
6	中期目標	学部と連携した教員採用を行い、4 つの研究分野に適切に配置する。オープンセミナーや複数教員による学外資金獲得活動を通して、教員の研究交流を活発にする。
	年度目標	学部と連携し、教育・研究領域を網羅する教員組織を編成するための人事を行う。
	達成指標	教育・研究領域を定めた人事の実施。
No	評価基準	学生支援

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

7	中期目標	学部と協力しながら、学生の学位取得後のキャリア支援体制を充実する。留学生向けの日本語教育の支援を継続する。
	年度目標	COVID-19 に対応するために必要な学生支援について引き続き検討し、支援体制を整備する。
	達成指標	COVID-19 に対応した学生支援体制の整備。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
8	中期目標	社会貢献を意識した研究活動成果の公開を進める。外部資金による研究活動や共同研究を通じた研究内容の開示
	年度目標	外部資金による研究活動の一環として、科研費への応募や研究機関・企業との共同研究を推進する。
	達成指標	教授会等における科研費への応募や研究機関・企業との共同研究の推奨。

【重点目標】

COVID-19 の感染拡大防止に対応したハイフレックス形態による講義・研究指導の実施を重点目標とする。

【目標を達成するための施策等】

対面とオンラインを併用したリアルタイムのハイフレックス形態による講義・研究指導によって、大学院教育に適した少人数教育・個別指導を実施する。

【2021 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

情報科学研究科では、2021 年度の中期目標、年度目標は、共に概ね適切に設定されていると考えられる。重点目標にある COVID-19 の感染拡大防止に対応したハイフレックス形態による講義・研究指導の実施、により大学院教育に適した少人数教育・個別指導を実施するとされているが、情報科学分野ならではの研究スタイルの一環として、効果的な教育および研究指導方法とその問題点を検証し、社会に向けても発信することに期待したい。

社会人博士課程学生の早期修了と産業界との連携の推進及び産学連携を効果的に組み合わせた人材育成の枠組みが確立されるよう、今後の展開に期待する。

【大学評価総評】

情報科学研究科では、修士課程および博士後期課程ともにコースワークとリサーチワークを適切に組み合わせた教育、かつ専門分野の高度化に即応できる教育が提供されている。また、ダブルディグリープログラム（DDP）および理工学研究科と共同での英語による学位授与を行うIISTを進めている点はグローバル化の観点から高く評価される。特に、2020年6月に中国模範的ソフトウェア学院連盟との協定が更新されたことで、留学生受け入れ数のさらなる向上が期待される。英語と日本語両方の授業を用意し、学生の能力に応じて選択できる点は、一般学生のグローバル化推進にも役立つものと評価される。さらには、情報科学研究科独自の取り組みとして、教員の研究テーマについて交流する場としての、情報科学オープンセミナーの設定、科研費等外部資金応募の奨励など研究科内のFD 活動が適切に行われていることは評価に値する。COVID-19下にあっては、情報科学分野の強みを生かした、素早いオンライン、ハイブリッド対応が高く評価される。

中期目標・年度目標も概ね適切に設定されている。今後、情報科学分野ならではの研究スタイルの一環として、オンライン、ハイフレックスの効果的な教育および研究指導方法とその問題点を検証し、社会に向けても発信することに期待したい。また 2020 年度に設定された社会人博士課程学生の早期修了の制度を生かし、産業界との連携を効果的に組み合わせた人材育成の道筋が確立されることを期待する。

※注１　回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注２　回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。